二〇一九年（平成三十一年）四月一日発行（毎月一回一日発行）　香蘭　第九十六巻第四号

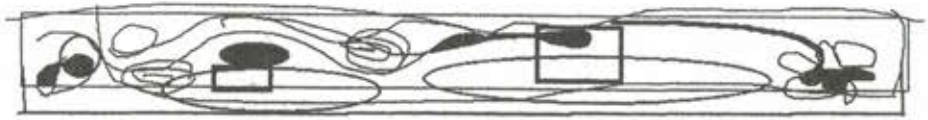
村野次郎創刊

香蘭

2019年（平成31年）4月号

斎藤俊子歌集『春の扉』批評特集

第96巻　第4号　通巻1060号



香蘭

2019年（平成31年）4月号
斎藤俊子歌集『春の扉』批評特集
第96巻　第4号　通巻1060号

目次

村野次郎作品　私の愛誦歌（44）……黒羽紘子……表二
作品一特選（四月号）……石井・西野・本田・伊藤（康）・飯島・伊藤（美）・大井田・鈴木（桂）・石田……2
作品二・三特選（二月号）……岩田・白井・江口・杉山（ま）・高田・田渕・牧田・小原・河野・庄司・手島・徳渕・馬場……4
近詠十五首　追憶……工藤渓子……6
作品
一……8
二……24
三……38
推薦香蘭集……45
香蘭集……46
転載　西野美智代歌集『若苗色』評……遠藤由季……53
歌の生まれる場所（75）……平川良枝……56
村野次郎への旅（109）……千々和久幸……58
斎藤俊子歌集『春の扉』批評特集……小島熱子（32）・高島憲子（34）・高田みちゑ（36）・杉山ますゑ（37）……62
七首抄（二月号）……川原・西・徳渕・柳沼……64
エッセイ・自由研究　伸縮する湖「トンレサップ湖」……関口静子……65
焦点（二月号）　植物や自然を取り入れた歌……大井田啓子……67
近詠十五首「風味絶佳」評（二月号）……八木橋洋子……76
作品一特選欄評（二月号）……桜井京子……78
作品評（二月号）　作品一……長野道子……79
作品二……市川義和……80
作品三……河野慎二……84
香蘭集……田渕宏之……89
緑地帯……朝香・三上・田端・柏原（義）……94・表三
明宝研究会第一〇三回一月例会……編集部・脇谷房子・江口絹代……98
他誌拝見　100……本田民子……100
歌集管見　花岡カヲル歌集『枯葉のみやげ』評……長野道子……107
転載　一首鑑賞　桜井京子歌集『超高層の憂鬱』評……花山周子……108
桜井京子歌集『超高層の憂鬱』より……藤田千鶴……109
他誌に掲載された香蘭会員の作品と動き……
平成三十一年新年歌会記……
歌会及び会合・会員消息・他……
編集後記……
表紙絵……中村陽子「鏡を置けば……」　目次カット……和田和雄

村野次郎作品　私の愛誦歌（44）

老づけばものみなわれより遠のきし思いして
夜の街より帰る

『明宝』

黒羽紘子

「香蘭」の創刊者の一人であった村野次郎先生が、この世を去って四十余年。「香蘭」が今に村野先生の志を継ぎ、千々和代表のもと、営々と継続発展しているこの結束に、感動し、感謝の気持でいっぱいになる。先生の歌集『明宝』より一首を選び、私の先生を偲ぶ歌とさせていただきました。

この歌、何かの所用で外出された先生が、もの思いに耽りながら、夜の街を歩いて帰る姿がまず想像される。夜の街というのだから賑やかな光景が思われるが、先生の思いは、少し離れたところにある。かつての賑やかで意気盛んだった日々は、現在の先生の心境からは、遠い所に行ってしまったというのが、上句にこめられた感慨だと思う。そんな一抹の寂しさを抱えて、先生は町並みを歩いている。

これが老いというものかと。この現実を、静かに受け容れようとしているのだ。「行く」より「帰る」に重心がかかるのも老いの現実である。

（『明宝』105頁、『村野次郎三百首』73頁所収）

四選者の作品

死んだふり　平塚　千々和　久幸

二日酔い残る頭で書き継げるエッセイいくども後戻りせり
昨日と同じ夕焼けを見ていち日が終わらんとする嘆かうなかれ
意味のなき連休の増え誰も彼も死んだふりして平成終る
ビンゴなどとつまらぬ遊び流行りたるニキビ少年なりし昭和に
考えに考え決断なしたるが結果は考える前と変わらず
あの人も孤独この人も孤独とう孤独のバーゲンセールめでたや
父の見し穂すすき母の山茶花に乏しき冬の光の差せり
病棟の妻の枕辺に鏡餅飾りこの年を越えゆかんとす

じわっと迫る　我孫子　丸山　三枝子

〈七十年無欠詠です〉添え書きの一語貴し門倉先生
お墓の順に乗り込むと言い乗り込める牧野さんはもてきぱき元気
加速して老けゆくような夕まぐれ白粉花が匂いたつなり
日日のノルマと格闘していたらあっと立つ壁　締切日ああ
じゃれ合って小さな犬と暮らすうち六十代が過ぎてしまった
古希いわうメール嬉しもこれよりは自分大事に自在に過ごせ
マンションの安全確認訓練に「無事です」のマグネットシートを掲ぐ
「無事です」のシート貼りつつ無事ならぬ時の怖さがじわっと迫る

似て非なるもの　東京　桜井　京子

ぎざぎざの篠懸の葉がまろびゆくだれも通らぬ冬の石径
ほんたうのことは互ひに言はぬまま泡立草に冬が来てゐる
街かどに解体中のビルがあり平成最後とかかはりはなく
向かうから老いたる犬を引いて来る老犬家と老犬家は似て非なるもの
花束を渡す役目をあたへらる六十なかばは若いのだらう
ああこれは別れの手紙と読みおへぬ今日の青ぞら雲すこしある
冬さむき明けの眠りを覚ましたる非通知表示の電話かかり来
ヒーターにタオルの乾く冬の日よミルクを飲めば眠る花夏は

ニュース7　横浜　渡辺　礼比子

分かちつつ食む海胆のジュレしあわせを前にし気弱になれるあなたと
頭頂に抜けんばかりに歌いたる童謡歌手ら絶滅したり
大丈夫かNHKよ「ニュース7」トップが〈嵐〉活動休止
ともどもに大吉引きし子の夫婦　それはそれとて心配になる
つね先をゆく妹が駅近のマンション購えり　老い支度とぞ
マンションに移ると聞けば何よりも「ゴミ捨て随時」の暮し羨しむ
来月は壊さん家の小き窓撮りて送り来　楓見ゆる窓
真旅こそ恋しきものをランチ付き温泉プランで今はよしとす

作品一特選

（四月号作品、五選者共選）

アレルギー　習志野　石井雅子

うす陽さす冬の薔薇園のなかに立ち託ち顔なる白きフローラ
アレルギーを嘆くに馴染みの医師の言ふ「生きてゐるから仕方がないよ」
戦力にならぬと言はれ居酒屋の飲兵衛のとなりでポテトを齧る
性格の悪いはうが短歌が上手と栗木京子がテレビで言へり
「今日の駅やる気があつてうるせえなあ」アナウンスひびくに男が言へり
浴槽の栓をゆつくり引き抜けば時計回りに水は落ちゆく
過去なんてどうでも良くて大寒の部屋に芽吹けるパキラの若葉

クラクション　東京　西野美智代

稀勢の里が引退告げし夕刻に力尽きたり義弟もまた
献奏は〈計画されたものでない〉米国靖の甥の悲鳴か
住民の反対を受け出棺のクラクションさへ鳴らさずに発つ
その父の葬りを済ませ二日後にニューヨークへと甥は帰りぬ
子の帰宅を待つかのやうに倒れたるわが病名は依存症なり
『老人の取扱説明書』が売れに売れたり十七万部
「平成」の額を掲げて会見の小渕長官しばしば映る

コンビニ弁当　長崎　本田民子

富士山を見るが習いの空の旅槍ヶ岳穂高を見しは初めて
俯瞰する槍ヶ岳うっすら雪纏い厳しき冬に立ち向かうなり
フライトを終えてゲートをくぐり来る機長が手に持つコンビニ弁当
渡り蟹も命がけなり湯にはなつ一瞬するどく親指を咬む
芽が出ると言われて食べしお節の慈姑われら五姉妹仲良く老いぬ
おふくろの味だったらし義弟も夫も巻ずしばかりを食べる
平成最後の大晦日なり信用金庫の五時のチャイムがあたりに響く

大寒　東京　伊藤康子

ぷくぷくと鍋の底より沸く泡の大きく膨らみ佳き日なるらん
残業し駆け込むホームに聞こえくる　ただ今運転を見合わせてます
新しい手帳に記す子の住所おひとり様の雪国暮らし
お互いに年末年始は仕事ゆえ息子の帰省は大寒の頃
大寒の過ぎて帰省の子によそう大鍋作りのおかあの雑煮
長岡は新幹線が止まるからまあまあ近いと子になだめらる
年末より共に働く女子社員年始凌いであぁインフルエンザ

返り花　川崎　飯島智恵子

つつがなき一日であれと朝床に声かけ屈伸運動始む
草木瓜の返り花咲く生垣に虻がひすがらきて遊びおり
向い風さけてうつむき上る坂われ目に白きはこべらの花
ところ得て花を咲かせよたんぽぽの白い穂絮が一息に吹く
人住まぬこの家の庭に陽を浴びて盗人萩が素枯れておりぬ
夜叉五倍子の房ゆれやまぬ　この丘の昔の話を始めましょうか
桐の花見る機会捨て別れたり月に一度の歌会であれば

とりあえず　川崎　伊藤美恵子

買い物の仕方知らねばスーパーに夫はうちのめされて戻り来
とりあえず二人でがんばろう、そうしよう　そう思えたのは一週間だけ
冬空にそよぐコスモス色褪せてなぐさめくるるなわれの不遇を
ベッドより起きれば冬陽にさざんかの細枝さやさやきらめくも見ゆ
思いがけずできた寝返りさりながらぐずぐずしてたらかえれなくなる
ATMでお金下ろせない人いると聞いてはいたがこんな近くに
新年歌会の懇親会のさざめきをベッドに掛けて思う夕ぐれ

吊り革のいたづら　川崎　大井田啓子

あふむけに電車の床に転倒し失神せしかと尋ねられをり
山手線の車内の床は輝きてわたしの転倒待ちゐしならむ
わたくしが取り損ねたる吊り革はあつと叫んで揺れたのだらう
仰向けに倒れし我を避けながら代々木の駅で下車する人ら
倒れたる我に言葉をかくるひと手を貸し助け起こすひとなど
呆然とゐるわたくしに症状を聞き指示せしはドクターならむ
音高く床を打ちたる後頭部をひりひり抱へ歌会へ向かふ

月光　西宮　鈴木桂子

誰なのだらう祖父母、父母、夫、生きし世にいちばん深き傷負ひたるは
十七歳のマスクはづすをいやがればマスクの下の顔知らぬまま
水鳥を浮かべてしづかわが問ひに何も語らず冬の武庫川
月光は音なく降れり　わが窓に父ねむらせて母ねむらせて
下向くと気づけばあはれこの日ごろ皇帝ダリアも見ずに過ぎたり
〈閉店〉の小さき貼り紙またひとつ銀座とふ名の商店街に
乳色の湯気いつぱいに立ち籠むる夜の湯に誦す〈阿毘羅吽欠〉

若き日の母　島根　石田フクエ

一年に一度の便りと書き添へて干支の猪笑つてとどく
大寒に入りて概ね暖かくよろこぶ声あり案ずるもあり
ふきのたう見つけてときめく手の平に載るほどの春大いなる春
辛いことあれば向かひの大き山を見よと若き日の母は言ひにき
母と仰ぎし山は変らじ啄木の歌が峰より降りくるやうな
突然の高熱に耐へる夫に添ひ救急車の音を鼓動のごと聞く
三十九度の熱治まりし夫と見る立春近き今日の空の青さを

作品二、三特選

（二月号作品から）　香山静子選

〈作品二〉

炬燵布団　安来　岩田明美

新製品並ぶ片隅に〈マダムジュジュ〉懐かしきかな紫の箱
継ぎ接ぎの堅き緋の炬燵布団ごはごはするも剔染みてきたり
藍染の炬燵布団の温もれば決りのごとくのつそりと猫
追ひ越せる若者真似て昇りゆく駅の跨線橋一段飛ばしに

・対象への迫り方に温もりがある。

眠りの底に　長野　臼井紀代子

ひかりの量青空の量風の量たっぷりとして秋の一日
大あくびひとつしてのちなだれゆく眠りの底に待つひとがいる
眠ければねむそうにゆがむ文字たどりペンは私以上にわたし

・固定観念に捉われぬ独特の発想。

眠たくてならぬ　柏江口絹代

眠れぬと言う妹に眠たくてならぬわたくしが責められている
決めごとをしないと決めた　隣室のテレビの音がなかなかきえぬ
お婆さんの席にお婆さんが座りいて満員電車は品川に行く

・肩の力を抜いたユーモラスな作品に惹かれた。

午後の紅茶　鎌倉　杉山ますゑ

縮まりし身の丈に合ふ年金の額に変はりぬどうにかしよう
庭にゐて月が出てるぞいいのかと声掛けくれしあなたは居ない
連れだちて月見がてらに蕎麦、うどん「みの和」の暖簾いく度くぐれる

・もうこの世にはいない夫を恋う作品が胸を打つ。

空白の時　鎌倉　高田みちゑ

うからより遂に切り出す墓仕舞ひ継ぐ者なければさうすればよい
血を分ける姉弟のゆゑひとつ家にありし昔の親しみ遥る
わだかまりあれども逢へばたちまちに空白の時の解けゆくなり
葬式に注文つけて死ぬなんてかつこ悪いから止めておかう

・少子化の現代が浮き彫りにされた感がある。

錦の宴　倉敷　田淵宏之

吉備路なる苅田の脇の道行けば「買つておくれ」と野菜が並ぶ
億の付くお金に非ずささやかな善意を信ずる野菜が並ぶ
シイタケを一皿買ひて代金の小銭を入れれば音が鳴りたり

・庶民の生活に対して温もりのある見方をしている。

円覚寺　藤沢　牧田明子

問ひたれば箒を使ふ手を止める僧の所作より物音あらず

僧の座る暗き廊下とわれの辺と仏の道がしづかに隔つ
粛々と僧らのくらす寺内をめぐれるほどに灯りは暗し

・作者の真摯な態度に好感をもつ。

〈作品三〉

ブラックアウト　鎌倉　小原裕光

前線の雲の間に見せくれしこの十五夜の月の明るさ
こんなにも綺麗だったか天の川ブラックアウトの古里の空
音もなく夕空に浮かぶ旅客機の銀のかがよい西へと向かう

・久々に見る古里の空の美しさに素直に感動する作者。

いつか読む本　鎌倉　河野慎二

チェロを弾く猫がわたしの中にをりひとり酔ひたる夜はレクイエム
まだ読まぬ本捨てられず本棚に返してきつといつか読む本
夏の夜にすり寄る猫は暑苦しい妻にかくれて冷や酒を汲む

・常識にはまることなく独特の感性を伸ばしてほしい。

日々是好日　横浜　庄司健造

好日と言える日があり初秋のすじ雲ゆったり流れてゆきぬ
起きぬけにおはようと言える君がいて遠く聞こゆる山鳩の声
きな臭き世を憂いつつ縦の木のゆるぎなきかな天辺に伸ぶ

・物事の明るい面を見て作品化している。

胆石　福岡　手島洋一

五年間行方不明の携帯を正装をして受け取りに行く
悲しみを抑える力弱まりて年の明ければ古希を迎える
先輩の名をあ行より遡りOB会に胸張り向かう

・すべての事に礼儀正しい作者像が見える。

晩酌の供　柏　徳渕育子

ギンナンを歳の数ほど拾いきてレンジでポポン晩酌の供
校庭はしんとしていま給食中やがて飛び出し紅葉散らす
胸の奥キュンキュンさせる想い出に断捨離ならず又もどしたり

・思い出を大切にしている作者。

このままずっと　松江　馬場美信

ふわふわの桜色した嬰児をこのままずっと抱いていたいよ
沐浴のみどりごはじっと見つめていて娘は母の顔して洗う

・祖母としての愛情が微笑ましい。

地球儀　横浜　小林純子

この婚に異議はありやと神父問ひ僅か首ふる花嫁の父
障害者パスを揚げて乗る親子母より息子に白髪多き
極点に挨を乗せし地球儀は軸の歪みぬ伯父なき書斎に

・周囲の人々への気くばりがある。

追　憶

工藤　渓子

北国の寒村に生まれ札幌と東京に暮し老いに老いたり
大正ロマンと呼ばれし時代に生を受け軍国主義の中を育ちぬ
教育勅語暗誦させられし小学生　諳じて今に言える詮なさ
ひとつ林檎かじり合いては再会と愛確かめて征かしめにけり
追憶の彼方にひとりの人の居て夢で逢うときいつも無言なり
戦時下の命保ちて終戦の勅語を聞きし二十二歳よ
ビルマより帰りし夫はしばらくを戦地のことは避けて言わざりき
奮発して夫に買いにしダウンコート老いたる息子によく似合うなり
来し方の哀歓ほどほどを肯えば今宵半月澄みて明るし
起きいでて熱き紅茶にたっぷりの蜂蜜入れる　生きているなり
思想の自由求めて闘う人ありて怠惰なるこのわれの日常

近詠十五首

ひと言随想

九十五年

高齢化社会という語責むるごと新聞にありわれ九十五歳
おさげ髪ゆらして広野を駈けてゆく夢醒めて老いし身に戻りけり
大正に生まれ昭和平成と存(ながら)え新しき年号を待つ
永遠の時の流れに淨められ追憶しだいに美しくなる

小学校に入学した年に満州事変が始まり、女学校に入学した年に日支事変が起こり、女学校を卒業した年に太平洋戦争が開始された。

「追憶」を詠むとき、戦争を抜きには出来ない。しかし二十二歳の夏、敗戦という結末によってもたらされた七十三年に亘る平和の世に生きた幸いを深くかみしめている。

想えば、四十歳中半から「香蘭」に入会し詠み始めた短歌。当時は若者達が「造反有理」を叫び、イデオロギー相剋の時代で、板橋区が主催した短歌教室では近藤芳美が「思想を詠め」と言っていた。

それから四十年余。社会の情況は急激に変化したが、自分は殆んど変っていない。新しい世情にも、新しい感覚で詠む短歌界の傾向にも追いついて行けず、初心の頃の迷い多き姿勢のままに、九十五年の来し方を詠んでみた。

村野次郎への旅（109）
「地上巡禮」と次郎（二）

千々和　久幸

「地上巡禮」創刊号（1914年、大正3年9月1日発行）に掲載された村野次郎先生の「矢羽根麥」5首は、のちに歌集『夕あかり』（香蘭叢書　第一三〇篇、昭和63・12）にそっくり収録されることになる。左にその5首を再録する。

①矢羽根麥シルクハットに蟬けば夕日かなしくめぐりやまずも
②米つきがひねもす米を搗いて居りわがたへがたきゆふもやの中に
③金松（きんしょう）赤く蟬け金松わが戀びとはかなしきものを
④鳳仙花赤きが戀ししげみより雉の出づる初夏の白光
⑤雑魚も來ぬ田甫の水につやけしの白き月居る蜜の寂寥

①については前回すでに触れた。ついでにこの作品について、神山裕一顕問の『夕あかり鑑賞』から関係個所を抄出する。

府中の村野家は当主が代々儀右衛門を名のる旧家であったから、そのような参列者があったのであろう。この歌は彼らが葬列に加わって麦畑の中の道を粛々と進んで行く様を詠んだのである。当時は多く土葬であって、棺を輿のように人夫たちがかつぎ、墓地まで行列を作って行くのであった。これは挽歌である。挽歌ではあるが、若い日の作者の感傷は甘やかである。そこに師白秋の『桐の花』の歌風の影響を見ることができる。（香蘭七十周年記念特集号、平成5・3）

さすがに行き届いた鑑賞であり、教えられるところが多い。

②の歌、ここで言う「米つき」は「玄米をついて精白すること。また、その人」（広辞苑）ではなく、「米搗き飛蝗」（ショウリョウバッタの別称）のことであろう。「後脚をそろえて持つと、米を搗くような動作をするからいう」（同）のでこの名がある。

先生はこんな若い時分から三句切れを使用されていたものか、下句の飛躍が一首のキモ（見所、急所）である。だがここではその背景が、上手にぼかしてある。これが当時の流行の詠み口であったらしい。

二十歳の青年の鬱屈した心情の吐露と言ってしまえばそれまでだが、米搗き飛蝗の単調で退屈な動作への苛立ちが夕霧の感傷的な雰囲気と重なり、こう言わしめたものだろう。

③の歌、初句の「金松（きんしょう）」は手元の辞書にはない。ネットには「コウヤマキ科の常緑針葉高木、園芸植物」とあるが詳らかにしない。となれば上句から雰囲気を想像するだけで、事実はスキップするしかない。

それにしても「戀びとはかなしきものを」とは、青年次郎にしてよくぞ詠い上げたという思いである。この昂揚感を聞けば、この一首を丸ごと理解した気になる。「かなし」は「愛し・悲し・哀し」のいずれの字を当てても

よく、そのすべてを包含していると読める。先生にもこんな初々しい青春があったことを再認識させられた。

少し長いが、神山裕一顕問の前掲の「香蘭七十周年記念特集号」の同所から引く。

次郎の相聞歌としては、珍しく「恋びと」というような言葉を使った歌として珍重するに足る。次郎は私たち弟子どもが若かったころの香蘭で、「おもかげ派」という言葉を作って、それを私たち相聞歌を詠む連中にあてはめていた。当時、香蘭の若者たちの間に、恋に恋するような歌が多かったからである。次郎自身にもそのようなソフトフォーカスな歌が多かったので、私たちもまねたのであった。

『夕あかり』という歌集名も、柔らかい印象のもので、何ごとも明らさまに言わず、ほのかに、匂わせると言う手法が当時の香蘭では好まれていた。その次郎も自分の若い日には、「わが恋びとはかなしきものを」と情熱的に歌いあげる日があったのである。

この歌、明るく、ロマンチックで、情熱的であるが、写生的に見れば不完全である。松の在り処も分からず、恋びととどんな状態でいるのかも分らない。言っているのは情熱の叫びだけである。ここで、松に対して「赤く蟬け」と言っているのは、わが恋ごころを松に打ちつけるようにして、心の高揚を叫んでいるのである。あふれる恋ごころが写生をけし飛ばしている。ここらが『桐の花』的といえるところだ。

「香蘭」前史としても「香蘭」の青春期としても貴重な証言である。前半の「珍重するに足る」には思わず笑ってしまったし、後半の「写生をけし飛ばし」にも納得した。

④の歌、二句でいったん切れ、そのあとに鳳仙花を取り巻く情景を配するといった構成になっている。「鳳仙花」の赤と「初夏の白光」の眩しさに、若い感性が鋭敏に反応したものだろう。二十歳前後の感性は一見凡庸に見える、こんな光景にも震えるのだ。「詩は青春の文学」とは、まさしく文学の青春を言い当てたものと読める。

わたしの好みからすれば二句までの情熱の迸りをいま少しフォローして欲しかったが、それは読者の欲というものだろう。

⑤の歌、作者は昼下がりのしんとした田甫の傍らを通り過ぎようとしている。ふと眼を止めると、いつもは居る蛍の蚴やドジョウの姿はなく、ぽんやりと「白き月」が浮いていたというのである。

「雑魚」に挨拶のひとつもしようとしたのに、そこには場違いな「白き月」が映っていた。いや、映っていたではない。「白き月居る」である。それを「つやけしの」と強い言葉で言い切っている。先生には「月」が余計な異物と映ったものか。

後年の村野先生の詠み口からすると、相当に思い切った表現だが、あるいはこれは気鋭の青年歌人村野次郎の外連（技巧）であったのかも知れぬ。その真意は時代や年齢を差し引いても、実はよく解らない。

いずれにしろ先生の晩年の作品を読み慣れた眼からすれば、戯（たわ）つく、角の多い（熟れない）表現に見える。

神山顕問の評はこうである。「後年の次郎ならば『寂寥』までは言わなかったかもしれない」（七十周年記念特集号）

なるほど「寂寥」はいかにもナマな表現である。現在の「香蘭」の水準なら、説明的だから不要と一蹴されるところであろう。